

塙

はなわ

保己

ほ

き

一

いち

物語

もの

がたり

The story of Hokiichi Hanawa



ヘレン・ケラーが目標とした人
Helen Keller's Role Model



 埼玉県
saitama prefecture

最終ページに保己一に挑戦 Quiz があるよ!物語を読んだら挑戦してみてね!

塙保己一

「私は特別の思いをもって、埼玉にやってまいりました。それはつらく苦しい時でも、この埼玉ゆかりのハナワ・ホキイチ先生を目標に頑張ることができ、「今の私」があるからです。」

上の言葉は、世界的な偉人として讃えられている、目も見えず、耳も聞こえず、そのために話すことも困難だった女性、ヘレン・ケラーが、昭和12年（1937年）埼玉会館で開かれた講演会で語った言葉です。塙保己一は、江戸時代後期に活躍した埼玉県本庄市出身の全盲の学者です。現在でも「これをなくしては日本文化の歴史を理解することは困難」とまで言われる前人未至の大文献集『群書類従』を編集・出版しました。世界的偉人ヘレン・ケラーが目標とした塙保己一とはどんな人物だったのでしょうか。



ヘレンケラーが懐かしそうに両手で触れた保己一の銅像▲

「私は特別の思いをもって、埼玉にやってまいりました。それはつらく苦しい時でも、この埼玉ゆかりのハナワ・ホキイチ先生を目標に

▲保己一の生家
現在も国の指定文化財として保存されている。



塙保己一は、延享3年（1746年）に武蔵国児玉郡保木野村に生まれました。幼い頃から、大人が読んでくれた本の内容を記憶し忘れない子どもだったそうです。7歳のとき、病気がもとで失明してしまいます。さらには12歳のときには心の支えだった、母を亡くし、これから先どう生きていけばよいか途方にくれてしまいます。そんなとき、江戸には「太平記読み」と呼ばれ、物語を語る人たちによって生計を立てている人たちが

がいるという話しを聞きます。学問好きで、記憶力が抜群のこの少年は「自分にもできる仕事がある！」と考え、江戸に出ていくことを決心しました。15歳で江戸にでた保己一は、雨富検校という師匠の盲人一座入門しました。しかし、江戸での現実は厳しく、あんま・はりの仕事や三味線・琴の芸能関係、金貸し業ばかりで、保己一の望む学問はさせてもらえなかったのです。どうしても好きになれない盲人一座の修業にあけられる生活に、

保己一は絶望しました。将来の夢や希望も持てなくなった保己一は、とうとう自殺未遂事件を起こしてしまいます。師匠の雨富検校は、何をさせてもものにならない、ふがいない保己一をどうしたものかと思案しました。思いあぐねた末、本人が好きな学問の道に進むことを許したのです。それからの保己一は、水を得た魚のように、何事にも前向きに取り組み、次第

にあんまの腕もあがっていききました。これには、彼の学問好きを知って、上手いとは言えないあんまながらもひいきにしてくれた方の支えもありました。本を読んでもらっては、お礼にあんまをしてお返したのです。そうしているうちに次第に学者としての評判が高まります。保己一の盲人一座での地位が向上するにつれ、自然と協力してくれる人たちも増えていきました。

塙保己一を育てた盲人一座

塙保己一が活躍した時代である江戸時代には、「当道座」と呼ばれる日本独特の盲人一座制度がありました（盲人の職業組合のような組織で、そこには厳格な階級制度がありました）。一番上が「検校」、次が「勾当」、3番目が「衆分」、それ以外は平の盲人になっていました。「検校」になると、経済的に恵まれただけでなく、直参旗本と同等の身分として扱われたのです。伝統的な職業は平家琵琶を演じる琵琶法師でしたが、江戸時代にはいと、琴や三味線の音曲、あんま・はりの治療、「座頭金」といわれる金貸し業が盲人の主な仕事になっていきました。当時、江戸幕府は「当道座」を公認し、広く自

治権を与えていました。また、盲人のお互いの利益を守るとともに、若い盲人を教育するといった役割を担っていました。そして、全国の盲人を当道座に加入させ、検校の支配に属するよう通達していました。そのため、塙保己一も雨富検校という盲人の一座に入門しています。そして、伝統的な職業に関しては、必ずしも優秀な弟子ではなかったと言われています。しかし、「当道座」では、自立した盲人が、目の不自由な子を責任をもって一人前に育て上げていく伝統が確立されていました。それが、結果として盲目の大学者を生み出していくことになるのです。

ある晩のこと、いつものようにある武士の奥方の腰や肩をもんであげ、お金をいただくかわりに、本を読んでもらっていました。蚊帳の中で読む奥方は、彼が蚊帳の外で両手をひもで縛り、じっと聞いているのに気づきました。奥方がどうしたのかと尋ねると「蚊に気をとられると、せっかく読んでいただいた本の内容を聞き忘れてしまうからです。」と答えたのです。それに感心した奥方は、ご褒美に「栄華物語」を買って与え、保己一はそれを生涯大事にしたそうです。

かたい意思と努力の人





群書類従

安永8年(1779年)保己一34歳のとき、次のように思い立ちました。

「学問をしたい人はだれでも、いつでも、どこでも必要な書物が読めるようにしてあげたい。先祖から託された日本の文化を絶やすことなく、しっかりと次の世代に伝えていきたい……これこそ自分に与えられた使命だ」

のちに文化史上かつてない大文献集となる「群書類従」の編集・出版に着手することを決意したので。

保己一が「群書類従」をまとめるまで、貴重な書物が大名や公家など、一部の限られた人のもの

保己一は一生の間に何十種類もの書物を編集し、出版しました。有名なのは「群書類従」です。これは、全国各地の貴重な書物を集め、25の部に分類した大文献集です。不自由な身にもかかわらず、書物のためならば遠くまで自分で出かけ、借りては弟子に写させたのです。「群書類従」666冊が完成したのは、74歳のときのことでした。34歳のとき思いついてから41年もの間、研究・編集・出版と休む間なく取り組み、ついに完成したのです。驚いたことに、この大きな仕事が終わると間もなく、次の「続群書類従」の準備に取りかかりました。しかし、生前には完成しませんでした。亡くなってから90年目に、明治時代の末についに完成しました。「群書類従」ははじめ、保己一が残した数千巻にのぼる書物は、今なお学問をする人にとってなくてはならないものになっています。

んでした。また、当時の書物は、書き写して伝えられたものだったため、本によって内容が異なったり、一部が欠けていることなどがありました。保己一はこれらの違いを丁寧に補正してまとめています。全国に散らばっていた多くの古い記録や史料を集めて分類、整理を41年間にわたって行いました。

現代のように印刷技術がないこの時代です。保己一は、このまとめた「群書類従」を多くの人が手にできるよう、版木(木の板に文字を彫り込んだもの)に彫り、印刷できるようにしました。全部で17244枚にも及びます。この版木は今なお刷り立てられており、保己一がまとめた当時と同じ「群書類従」を手にすることができ、勉強方法は目が見えない保己一にとって、



▲東京都渋谷区にある(社)温故学会に保存されている版木。

人に読んでもらったものを記憶していくことでした。その上で、膨大な量の文献をまとめるのは大変な作業です。また、版木を彫らせるにも莫大な費用がかかったことでしょう。研究面でも多くの人々の協力が必要であったことは想像に難くありません。そこには、彼が優れた人物であり、大変な努力家であったことはもちろん、多くの人々に多大な協力をあおげる人柄の持ち主であったこと

とがわかります。

そしてついに文政2年(1819年)、666冊からなる「群書類従」を出版するという大事業を成し遂げました。すでに74歳となっていました。

目が見える人であっても成し遂げることが困難な大事業を完成できたのは、「後世の人たちに、日本人の宝物である古来の精神文化を絶やすことなく伝えていきたい」という熱い思いでした。どんな困難な条件のもとでも、くじけることなく一途に自分の道を進んだのです。

この他にも、保己一は、日本独自の精神、特に外国からの影響を受けない日本古来の文化、日本人のこころを研究する現在の大学ともいえる学問所「和学講談所」を設立し、後継者を養成しました。

そして、文政4年(1821年)2月、盲人社会の最高位である総検校につき、同年9月に天命を全うしました。

和学講談所

寛政5年(1793年)、塙保己一によって創立された、和学の研究・教育機関です。和学とは、国学ともいって、日本独自の精神、特に外国からの仏教や儒教などの影響を受けない日本古来の文化、日本人のこころを研究する学問を言います。当時の国学者たちは、古語や古典文学の研究に忙しく、日本の歴史や律令を研究する余裕



がありませんでした。その状況を心配した保己一は、研究と教育の役割を担う「和学講談所」を自ら設けようと考えたのです。保己一の後継者である息子の塙次郎のときには、小笠原諸島の帰属問題がアメリカ、イギリス、ロシアなどとの間に持ち上がります。このとき、幕府の求めに応じて日本の領土であることを証明する歴史資料を提供したことにより、小笠原諸島が日本の領土であることが国際的に認められたのです。和学講談所の資料は、東京大学史料編纂所に引き継がれています。

保己一ならではのユーモア精神

ある晩、いつものように弟子たちが集まり、保己一から源氏物語の講義を受けていたときのことです。突然吹いてきた風に、ローソクの火が消えてしまいました。真っ暗闇になり、弟子たちは慌てました。すぐ事態を察した保己一は、ユーモアたっぷり、そして余裕たっぷり、こう言いました。「目が見えるということは、不便なものです」と。ヘレン・ケラーはこの話をとても愛していました。

塙保己一に関わる年表

※保己一の年齢は「数え年」で表記しています。数え年とは、年齢の数え方の一つで、生まれた時点を「1歳」とし、以降1月1日を迎えるたびに1歳加えるという方法です。

1746年(延享3年) 1歳
5月5日、武蔵国児玉郡保木野村(現埼玉県本庄市児玉町保木野)の百姓、荻野宇兵衛の長男として生れる。幼名寅之助。

1752年(宝暦2年) 7歳
病気で失明。辰之助と改名。

1760年(宝暦10年) 15歳
江戸に出て、雨富検校の門人となる。名を千弥と改める。

1761年(宝暦11年) 16歳
雨富検校に学問の道に入ることを許され、歌学や神道を学ぶ。

1763年(宝暦13年) 18歳
衆分となる。名を保木野一に変える。

1775年(安永4年) 30歳
勾当に昇進。雨富検校の本姓である「塙」を称することを許され、「塙保己一」と名乗る。

1779年(安永8年) 34歳
「群書類従」の出版を決意。

1783年(天明3年) 38歳
検校に昇進。

1786年(天明6年) 41歳
「群書類従」の出版計画を実行に移す。

1789年(寛政元年) 44歳
水戸藩による「大日本史」の校正に加わる。

1793年(寛政5年) 48歳
我が国最初の国学の専門機関「和学講談所」を設立。松平定信から「温故堂」の名をつけてもらう。

1819年(文政2年) 74歳
「群書類従」を完成。

1821年(文政4年) 76歳
総検校になる。9月12日死去。

1937年(昭和12年)
ヘレン・ケラーが来日。4月26日、「群書類従」の版木や塙保己一の小さなブロンズ像に触れる。

Hokiichi Hanawa

~ The famous blind scholar of Japan ~

(1746-1821)



Hokiichi Hanawa, the famous blind scholar is known for compiling "Gunsho ruiju (Great collection of old Japanese documents)".

Hokiichi Hanawa was born in the village of Hokino in Musashi Province (present-day Honjo City, Saitama Prefecture), but he went blind by the age of 7.

He went to Edo at 15, where he became a disciple of Ametomi Kengyo (Officer Ametomi). He couldn't progress in music with the Koto or Shamisen, and could not improve his acupuncture or massage skills.

However, he never gave up. As his master allowed him to do anything he wanted, he decided to start studying. He learned history, literature, medical science and jurisprudence from several masters.

There is a well-known story about him from this period.

One summer night, the wife of a samurai read a book for Hokiichi. She found that he had tied his hands together. Asked why he did so, he replied, "Whenever I move my hand to brush mosquitoes away, I tend to miss words of your reading. So as not to do that, I did this."

At the age of 34, he made up his mind to start compiling the national history of Japan. At last, 41 years after starting the project, he completed the great work of publishing, "Gunsho ruiju". It consisted of 666 volumes.

He also established "Wagaku Kodansho", an institute for the study of Japanese classics, in 1793.

In addition to scholarship, he devoted himself to his work, holding administrative posts responsible for supervision of the blind, including the lower rank of Koto, then Kengyo (Officer). Ultimately, in his final years, he advanced to the position of Sokengyo (Superior Officer).

In 1937, Ms. Helen Keller, who had three disabilities, visited Japan. She expressed her impression as follows: "When I was a child, my mother told me that Mr. Hanawa was my role model. I believe that his name will pass down from generation to generation like a stream of water."

保己一の像に両手で触れるヘレン・ケラー (写真右)▼

ヘレン・ケラーと塙保己一

(Ms. Helen Adams Keller, 1880~1968)



ヘレン・ケラーは、目も見えず、耳も聞こえず、そのため話すことが困難という重度の障害を負いながらも、その全生涯を教育と福祉、そして世界平和に尽力したことで世界的に知られています。ところで、そんな彼女にとって、塙保己一が障害を克服し、希望をもって生きる、努力することの意義を与え続けてき

た、特別な存在であったことはご存じでしょうか。彼女は、昭和12年に初来日した際、渋谷の温故学会を訪れ、母親から「日本の塙保己一先生はあなたの人生の目標となる方ですよ。」と教えられたことに触れ、こう話しています。「今日、こうして温故学会を訪問して先生の像に触れることができたのは、日本の訪問の中で最も意義深いものでした。使い古された質素な机と、優しそくに首をかしげた先生の像に触っていると、先生のお人柄が伝わってきて、心から尊敬の気持ちがいっそう強くなりました。先生のお名前は、水が流れるように、永遠に後世に伝えられていくに違いありません。」これは、どんな困難な状況の中でも輝いて生きたヘレン・ケラーが、幼くして失明したにもかかわらず努力して偉大な学者になった塙保己一を心の支えに、勇気と希望をもって生きた証と言えるでしょう。

日本最初の公認女性医師・荻野吟子(現・埼玉県熊谷市出身)は、困難にめげず医学校を優秀な成績で卒業しました。しかし、「昔から医者には男に決まっている」と言ってはばからない役人たちから医師への道を拒まれていたのです。男尊女卑の壁に医師への道を閉ざされかけていた吟子を救ったのは、保己一がまとめた古代律令の解説書「令義解」でした。そこには女性の医師についての規定があったのです。これが、「日本にも女性の医師がいた」という吟子の主張の根拠となったのです。



吟子を救った令義解



温故学会



渋沢栄一にとっての塙保己一

同じ埼玉県出身で、明治・大正時代に大実業家として活躍した渋沢栄一は、郷土の偉人である塙保己一の特長として、次の6点をあげている。

- ① 強固な意志を持っていたこと
- ② 何事にも活動的であったこと
- ③ 清廉潔白で無欲であったこと
- ④ 心が広く、人の意見によく耳をかたむけたこと
- ⑤ とっさの場合に機転がきくユーモアと心の余裕があったこと
- ⑥ 信じられないほどの記憶力の持ち主であったこと

日本の文化史上に輝く塙保己一の業績とその人物を広く伝えるために、ひ孫の塙忠雄や渋沢栄一等によって設立された学術文化団体。その代表的な業績である「群書類従」は、二百年以上もたつた今日でも、日本国内や外国の求めに応じて、当時の版木から刷り立てられ、活用されている。

保己一に挑戦 Quiz



塙保己一物語はいかがでしたか。信じられないほどの記憶力ですよね？ 僕も見習いたいものです。それには、まず頭の体操をしなくちゃかな？ さて、そこで、皆さんも彼にちなんだクイズに挑戦して、脳を活性化させてみませんか？

- 1 保己一が、病気がもとで失明してしまったのは、何歳の時だった？
- 2 保己一が15歳のとき、江戸に向かう決意をしたきっかけとなった職業は？
- 3 保己一が編集・出版した「群書類従」。その群書類従の版木は全部で何枚？
- 4 現在の大学ともいえる、保己一が設立した学問所の名称は？
- 5 世界的偉人ヘレン・ケラーに、塙保己一のことを教えたのは誰？

皆さんは、何問答えられましたか？ どうしても思い出せなかった人は、もう一度この物語を読み返してみてください。僕みたいに、塙保己一のことを好きになってくれたら嬉しいな！

埼玉県では平成19年度から障害がありながらも顕著な活躍をしている方やその支援者に対して「塙保己一賞」を贈っています。詳しくは下記ホームページをご覧ください。

お問い合わせ先



埼玉県福祉部 障害者社会参加推進室

〒330-9301 埼玉県さいたま市浦和区高砂3-15-1

tel.048-830-3310 fax.048-830-4789

E-mail: a3310-03@pref.saitama.lg.jp

http://www.pref.saitama.lg.jp/A03/B100/core.html



この本をそのまま読むことが困難な方のために、営利を目的とする場合を除き、「録音図書」「拡大写本」等の読書代替物への媒体変換を行うことは自由です。

協力者・協力機関(敬称略) ● 堺正一、(社)温故学会

参考文献 ● 「塙保己一とともに -ヘレン・ケラーと塙保己一-」 堺正一 著

「埼玉の三偉人に学ぶ」 堺正一 著